2020 年 4 月 12 日　　日本基督教団 八ヶ岳伝道所　復活祭 主日礼拝　　NO.1115
聖　　書　　詩編 194:147~148／マルコによる福音書 16:9~11
説　　教　　『 十字架を抱えた復活 』

「イエスは週の初めの日の朝早く、復活して、まずマグダラのマリアに御自身を現された(ﾏﾙｺ 16:9)」。まず初めに、一人のマリアの前に復活したイエスが現れた。その次は二人の弟子の前に現われ(16:12)、そして十一使徒の前に現われた(16:14)。
　そのように拡大し、今や世界中に「復活のキリスト」が宣べ伝えられている。復活証言の最初は、小さなほんの一点、マグダラのマリアの体験から流れ出した。

　イエスは見せしめの十字架で処刑され、弟子たちは霧散し、民衆は逆恨みし、神の愛を顕したイエスの教えはついえたかに見えた。ところが「蟻の穴がダムを決壊させる」譬えのように、復活はマリアの一点から広がっていった。だからといって劇的な逆転ホームランだったわけではない。
　マリアの証言は信じてもらえず(16:11)、続く二人の弟子の証言も信じてもらえず(16:13)、十一人の直弟子は復活のイエスに「不信仰とかたくなな心をとがめられた(16:14)」。
　イエスと一緒にいた人々はその時「泣き悲しんでいた(16:10)」ため、その深い悲しみの前では、復活の報告などたわごとに過ぎなかった。

　復活とは、死んだイエスが生前の姿で甦ることなのか。例えは悪いが、死者がゾンビのように生き返る怪異が何だというのか。
　天使からイエスの復活(16:6)を告げられた三人の女は(16:1)、「逃げ去り、震え上がり、正気を失って、恐ろしさのあまり口を塞いだ(16:8)」。弟子たちでさえ、甦ったイエスを見た時には「亡霊」だと思って恐れた(ﾙｶ 24:37)。現象を想像しても、そんなものは復活ではない。

「もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるだろう(ﾛﾏ 6:5)」。復活とは、キリストの死と復活に、この私が「あやかる(姿の類似)」こと。
　復活に「あやかる」ために、私たちは「キリストと共に十字架につけられ(6:6)」、人間には抗いがたい死を含んだ「罪の支配」から解き放たれる(6:6)。そんなバカな、私がどうやって十字架につけられるのか。
「洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかる者となった。それはキリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるため(6:4)」。

「復活」の真実が人々に「受肉化」されるには、個別に「泣き悲しみ(ﾏﾙｺ 16:10)」、古い私が「十字架につけられる(ﾛﾏ 6:6)」必要があった。私たちもマグダラのマリアのように、十字架から目をそむけず(ﾏﾙｺ 15:40)、自己の悲しみ経験を抱え、キリストの復活に「あやからせて」いただきたい。
　十字架は復活に抱えられている。人間イエスの言葉やふるまいも、降誕の出来事も、十字架を呑み込んだ復活によって明らかにされる。そんな復活を受け入れること、それはまさに聖霊の助けにほかならない。

「夜明けに先立ち、助けを求めて叫び、御言葉を待ち望みます(詩編 119:147)」。周囲は暗くても、真の光を信じて御言葉を待ち望む詩人。復活のイエスが最初に現われたのも、こんな暗い夜明け前であった(ﾏﾙｺ 16:9)。
　復活は、闇がもっとも蓄積される夜明け前に起こった。マグダラのマリアが一番初めに復活の光に出会った(16:9)。そしてその連続の果てに、私たちも復活に出会っている。
　復活の光は世に伝えられているが、私たちの周囲は未だ朧で、今かろうじて「かわたれどき」くらいか。

★

≪おまけのひとこと≫
復活祭の御馳走を食べていると　口の中で十字架が骨のようにゴツリとあたる　慎重に口を動かし
復活の肉だけを舌で外して呑み込んだ　皿に出すとそれは十字架ではなく　ただ二本の骨であった